

浜松医科大学医学部附属病院における電子カルテシステム導入の経緯について、木村氏はつぎのように話す。

「当院では、平成18年度（06年）に始まった医学部附属病院再整備事業によって、外来診療部門の耐震性の付与および機能が向上、電子カルテ導入のための電源やネッ

トワーク等のインフラ整備が進み、診療業務を電子化しても問題ないと判断して、12年に電子カルテシステム「MegaOaHR（NEC）」を導入したのです。

17年にバージョンアップを行いました。が、前述のとおり、HISに望むさまざまなアイデアを考え出し、NECだけでなく複数のベンダと綿密な打ち合わせを重ねながら実装してきました。

現在、「MegaOaHR」と各部門システムを活用して、請求業務支援、医療職の

業務サポート、キャリア支援、医療安全、災害医療対策等の分野において、非常に有用な機能を開発、実装しています。」

NEC製の電子カルテを選んだ理由について、木村氏はつぎのように指摘する。

「私が浜松医科大学に赴任した当時から、当院のHISにはNECのシステムを採用していますが、先ほど述べた病院側のカスタマイズのニーズに対して、積極的に対応する姿勢を示しているベンダがNECであると評価しています。一方、アイデアを提



小林利彦氏
1957年生まれ。1983年浜松医科大学医学部卒。同年静岡県立総合病院麻酔科研修医、焼津市立総合病院、富士宮市立病院等を経て、1991年浜松医科大学医学部附属病院第一外科医員、2000年同講師、2008年から2012年まで同院副院長（管理・運営担当）を兼務、2009年同院医療福祉支援センター特任准教授、2010年より現職

これを防ぐには、入院前に患者さんのトリアージがある程度行う必要があります。そのためには、今後、看護師や薬剤師、栄養士らによる入院前評価と介入を強化させる必要があります。場合によっては入院前の段階で適切な医療機関を紹介するといった対応も検討すべきかと考えています。

今後は、金山病院長先生がおっしゃった浜松医療センターなど市内病院との連携をさらに強めていくことが必要です。

金山 私当大学を卒業した1期生の頃から見ると、当院の発展は目覚ましく、感無量ですが、今後も多くの優秀な人材を集め、浜松医大で研究・勉強してよかったと思える大学病院にしたいと考えています。

業務サポート、キャリア支援、医療安全、災害医療対策等の分野において、非常に有用な機能を開発、実装しています。」

NEC製の電子カルテを選んだ理由について、木村氏はつぎのように指摘する。

「私が浜松医科大学に赴任した当時から、当院のHISにはNECのシステムを採用していますが、先ほど述べた病院側のカスタマイズのニーズに対して、積極的に対応する姿勢を示しているベンダがNECであると評価しています。一方、アイデアを提

ライン”を開設して紹介患者数を増やす取り組みを行いました。紹介患者数の増加に伴い、入院患者さんやその家族からさまざまな相談事にも対応する必要があることから、地域連携と患者相談に対応する部署として2003年に設立された医療福祉支援センターの機能強化を図りました。地域連携を強化することで患者さんも増え、地域からの信頼も厚くなったと思います。

「地域連携を実施する上で、医療ITが果たす役割をどのようにお考えでしょうか。」

小林 約10年前から、各地でさまざまな地域医療連携ネットワークシステムが構築されてきましたが、セキュリティ面などで今一つ納得できなかったこともあり、地域医療連携のIT化にはやや消極的であったかと思えます。

木村先生とも相談した結果、性能面だけでなく、費用対効果の面でも、その時点では、医療ITによる地域連携は難しいと考え、まずはアナログ的な人的ネットワークを構築することに力を入れました。

一方で、近年、医用画像のデジタル化に伴うCDやDVDなどの媒体によるやりとりは頻繁に行われるようになってきています。地域医療連携に関するシステムは高コストなものが多いため、木村先生が構築した「紹介時電子データ連携システム NetPD」は、コストを抑えながらも、よりセキュアで使い勝手も良く、業務負担を軽減するシステムとして高く評価しています。

「今後の展望について、お聞かせください。」

金山 院内では、2018年4月に光医学共同専攻を開設しましたので、光医学に関する取り組みを強化していきたいですね。国の支援による医工連携拠点棟（IMEC棟）も今年中に竣工する予定なので、地域の企業との産学連携活動や人材育成を促進する環境が一層充実します。

また、平成33年度竣工予定の機能強化棟は設計の最終段階に入っており、新棟建設の契機となった放射線治療施設だけでなく、化学療法センターや周産期母子センターの拡充、ロボット手術に代表される低侵襲の手術室を整備するなど、大学病院として重視すべき分野の機能強化を図る予定です。

「先進的な病院情報システムを構築されていますが、その狙いと効果をお聞かせください。」

金山 病院情報システムは、チーム医療を行う上で、診療情報の共有化、人手の省力化、患者の診療サービスの向上など、さまざまな面に貢献します。医療情報部の木村教授は、本邦における医療情報システムの第一人者ですが、当院の先進的な病院情報システムがこれらに大いに貢献していると感じています。

「前述されました医療安全に病院情報システムはどのように貢献していますか。」

金山 医療安全に関しても、当院は有用性の高い機能をシステムに実装しています。

例えば、昨今、医療事故で話題となっている放射線科の画像診断レポートの未読問題に関して、当院では未読のレポートについてすぐにリストアップし、診療科長に通知するシステムを、病理に関するレポートも併せて構築、実装しています。

医療情報システムに関する院内の要望へのレスポンスは非常に早く、当院では新たな機能を次々と開発しており、関係部署には感謝しています。

「費用対効果に優れた画像連携システムを活用していますか。」

小林 2000年代初め、当院は病床稼働率が70%台という病院経営が厳しい時代を迎えていました。私は、当院へ患者さんに来てもらうために地域の医師会との連携を深めることが不可欠と考え、地域連携室を創設し、開業医と大学病院のいわゆる“ホット

医療安全、チーム医療、人材育成等実践のために情報システム含め、院内インフラを積極的に整備

2018年4月に浜松医科大学医学部附属病院の病院長に就任した金山尚裕氏と、医療福祉支援センター特任教授として同院の地域医療連携に尽力している小林利彦氏に、同院の診療の現状と今後の展望、ならびに病院情報システムへの期待等について話を聞いた。

Interview

浜松医科大学医学部附属病院
病院長

金山尚裕 (かなやま・なおひろ) 氏

医療福祉支援センター センター長 特任教授
小林利彦 (こばやし・としひこ) 氏

——浜松医科大学病院の地域における役割についてお聞かせください。

金山 私は浜松医大の1期生ですが、当大学は1974年に設立されて以降、現在に至るまでに約4000人の医師を輩出してきました。卒業生の県内定着率も高く、県内の基幹施設、研修施設の多くは当院の関連施設となっている上、県内唯一の特定機能病院でもあり、地域でのプレゼンスは極めて高いと自負しています。

——診療の特徴についてお聞かせください。

金山 当院のミッションには、患者第一の安心・安全な医療、社会・地域医療への貢献、

良質な医療人の育成、高度な医療の追求、健全な病院運営の確立が挙げられますが、中でも医療安全が最上位になるのは間違いありません。

ただ、特定機能病院であることから、最新医療の提供と開発、加えて人材育成も大きなテーマとしています。2015年に導入した手術支援ロボット装置や、循環器疾患におけるハイブリッド手術室の導入は、まさにこのためです。これらは、低侵襲手術の普及や地域医療への貢献、そして若い医師の育成やリクルートの観点からもかなり貢献していると考えています。

——医療スタッフのキャリアパスにも熱心に取り組まれていますか。

金山 より良い医師を育成することは大学病院のミッションの1つですが、新専門医制度が始まりましたので、専門性を高める体制を充実させるとともに、リサーチマインドを持つ医師養成に力を入れています。

メディカルスタッフも各職種で専門性を求められています。当院は、特定行為に係る看護師の研修機関に申請し、県内唯一の研修施設になる予定です。また、看護師だけでなく、臨床検査技師や診療放射線技師などについても、それぞれの分野で研鑽を積んで、ライセンスを取得することを望んでいます。なお、このようなキャリアパス支援は医師ら医療スタッフのモチベーション向上にも大きく貢献すると考えています。

——チーム医療にも積極的に取り組まれていますか。

金山 私は医療安全担当の副院長に5年間就いたことがあるのですが、手術中における連携ミスから重篤な医療事故が起きると

といった病院経営の効率化につなげるための機能に関するアイデアを考え、そのいくつかをシステムで実現しています。」

同院では、主に医療安全、業務改善、請求業務支援、キャリア支援、災害医療対策といった分野で、HISに独自の新たな機能を盛り込み、診療業務の改善に貢献している。

「医療安全」

医療安全の分野では、肝炎対策や感染症対策、昨今問題となっているレポートの未読に関するアラート機能を実装している木村氏は話す（12ページ）。

「アラート機能は、医療者に、気づき」を与えるだけでなく、感染症対策などでは届出などの書面を作成することも必要なので、そのような書面作成についても電子カルテからデータを抽出・転記することで、医療者の業務負担を軽減する機能を備えています。

肝炎対策機能では、指定した薬剤をオーダーした時、ある検査が実施されているかチェックして、検査未実施や検査結果が陽性だった場合にメッセージを表示して、医療者に注意喚起を実施します。

また、感染症対策は医療安全への貢献だけでなく、診療報酬の請求業務にも役立つため、病院経営にも貢献できる機能となっています。

診療報酬改定では、2016年以降、医療スタッフが実施しようと思えば大汗をかいてなら可能なものの、IT技術を活用することで医療スタッフの業務負担が大きく軽減されるようなものに診療報

案し、当院で頑張り、勉強することが医療全体のためになると思ってもらえる大学病院でなければならないとも感じているところでは。

視座を変えるならば、大学病院もシステム開発に関して言えば、ベンダに選別されていると強く感じますね。当院は新設の医大であって、全国レベルからするとアピール度は決して高くはありません。NECをはじめ、医療ITに関する各ベンダに興味・関心をもってもらえるようにすることは、常に考えています。」

「診療支援のための各種新機能 標準化されたデータを生かして システム連携による多彩な機能を実装

同院では、標準化された診療データを活用し、電子カルテシステム「MegaOaHR」と各部門システムを連携させ、病院関係者のニーズに応えるさまざまな新機能を実装している。同院におけるHISのコンセプトについて、木村氏はつぎのように話す。

「HIS構築において、医療者に対する重要な機能は、なんとしても医師らデータの入力者に二度手間をさせないことです。医師や看護師、技師らがHISを扱う上で何を最も嫌がるかと言えば、同じ入力業務を繰り返すことです。また、どのタイミングでどの入力業務を行えばよいかを覚えておくことも苦手です。

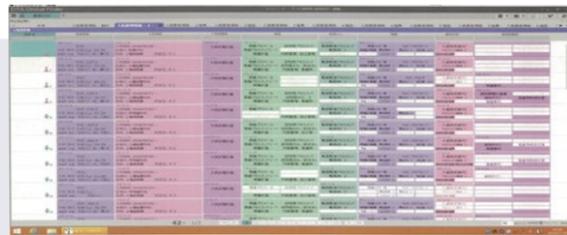
この2つこそITで解決できることであり、これらを実現しつつ、業務フローを改善し、医療職の労働負荷の軽減、患者の取り違え等の医療ミスを防ぐ医療安全の担保、請求業務の改善や病院の現状把握

業務改善



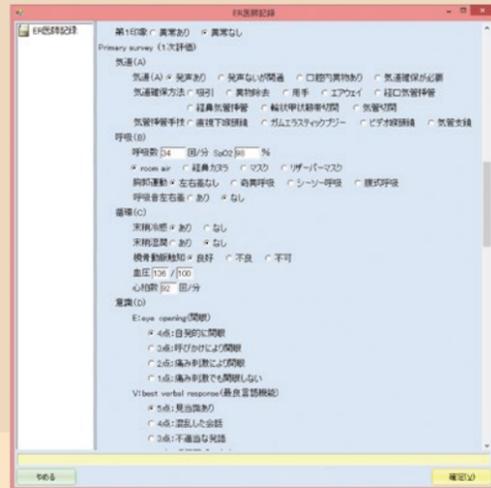
【大待たせ患者一覧】

金山尚裕病院長のオファーで構築。受付後、90分以上受診記録のない患者について、外来患者リスト一覧画面上で黄色く表示する（赤は受診を終了した患者）。大学病院を受診する患者は検査後に外来受診するケースも多いが、患者対応の目安となるとして評価されている。



【CITA クリニカルフロー】

診療業務支援ソリューション「Yahgee（富士フィルム）」と統合診療支援プラットフォーム「CITA Clinical Finder（同）」を組み合わせたワークフロー画面。各文書の、未作成、作成中、完了というステータスが色の濃さで一覧でき、進捗管理の助けになっている。文書作成支援による記録時間の短縮や業務の可視化による記入漏れ、診療報酬の算定漏れの防止などに貢献している。



スタンプ確定時に汎用（処置）オーダーを自動で出し、診察記事と医事請求に活用する

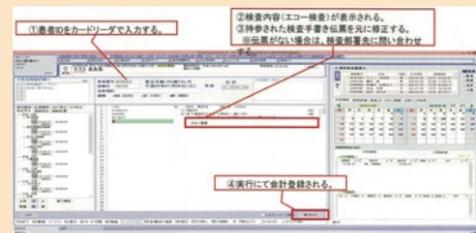


【救急処置連携】

救急医療の際、スタンプ機能を活用して、チェックボックスのチェックおよび数値の記入等のみで汎用（処置）オーダー、つまり会計メッセージを自動で出力。診察記事の自動作成と、DPCの範囲外である診療報酬算定にも利用されている。これらのデータはExcelによる集計も容易で、各種統計処理も可能となっている。

【問診票】

患者の基本情報や症状等に加え、妊娠の有無に関する項目を加えてバーコードによる診療データへの紐付けと、医事会計システムにデータを送ることで平成30年度に新設された妊婦加算の算定を容易にしている。問票によるバーコードを活用した患者データとの紐付けに関しては、木村氏が「特許を取得している」という（特許番号：特開2007-280205号）。



【エコー連携】

システムに直接接続していない外来部門の超音波診断装置の画像について、診察券をカードリーダーに通して紐付けすることで画像データをシステムに送信・保存。これまで保存が困難だった外来部門の超音波画像を良質に保存するとともに、診療報酬算定漏れを防止する。

医療安全

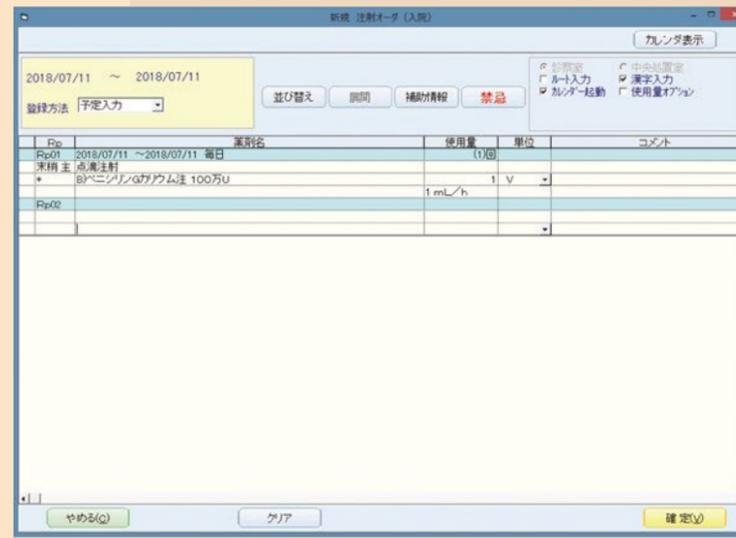
【未読既読レポート】

昨今、医療事故等で問題視されている未読レポートについて、RISの機能を活用、レポートが未読である状況の患者リストを一覧表示。オーダーした医師の注意喚起を実施。

【肝炎対策アラート機能】

指定した薬剤のオーダー時に、必要な検査が実施されているかを自動でチェックをし、検査未実施の場合はメッセージを表示する。B型肝炎対策ガイドラインで求められているHBs抗原に関する検査やHBc抗体およびHBs抗体の測定検査、それらの検査で陽性の患者に対するHBV DNA定量検査に対する注意喚起をメッセージとして表示する。

請求業務支援



指定した薬剤をオーダーした時に該当する文書の設定がある場合に文書システムを起動する



「はい」押した後は文書システム(Yahgee)にて制御する

【感染症対策（体制加算支援）】

感染防止対策加算1の実施項目である「特定抗菌薬（広域スペクトラムを有する抗菌薬、抗MRSA薬等）について」の文書作成を支援する機能。指定した薬剤をオーダーした時、該当する文書の設定がある場合に文書システムを起動する機能を活用。ワンクリックで文書ファイルが展開され、電子カルテシステムが持つ患者情報等はすでに文書に転記されており、医師は同薬剤をオーダーする理由をプルダウンで選択するだけで文書作成を実行できる。



「HISへの入力業務が簡便化したことで、診療録の内容が充実してきている」と話す看護部 看護部長の寺阪比呂子氏

「業務改善に関しては、臨床現場の皆さんが入力しようと考えている内容を精査し、電子カルテの持つスタンプ機能に反映させることが、入力業務を簡便化する上で重要です。そのためには、医療知識を修得しドクターの方々と用語の統一などを調整する必要がありますし、用語の変化にも対応できるようにするなど、普段のメンテナンスが欠かせません。

請求業務支援では、医療現場の皆さんにも伝票入力を行ってもらう必要があるのですが、診療記録を入力するだけでなく、わざわざ伝票入力をする必要がないようにシステムを構築することが重要です。この効率化が実現した意義は大きいですね」

看護部で情報システムを担当する看護部長の寺阪比呂子氏は、救急処置連携機能や記録システムの業務支援への有用性について、つぎのように話す。

「システムに入力しなければ先に進めない必須の入力項目設定ができるので、記録の漏れがなくなり、救急医療の現場で院内トリージ実施料に関する加算が取れるようになりました。それだけでなく、救急医療に関するさまざまな診療データを収集することも可能になっています。結果、これらのシステム導入により、診療録が充実してきています。

新しい記録システムの導入によって、次のようなメリットが得られることになりました。①重複記録を減らすことにより記録時間が短縮される、②フローチャートの活用で業務を可視化することにより記録漏れが減少するとともに、業務内容・記録内容の見直しや改善を図ることができるようになる、③記録の進捗状況を一元的かつ速やかに把握できるようになる、④各種情報のデータベース化の実現によって統計分析が容易になる、などです。



「診療記録に関する入力業務を済ませるだけで、会計入力も同時に完了できるシステム構築が重要」と話す医事課 診療情報係長金子龍一郎氏

「業務改善」

業務改善の分野では、救急医療の現場で、煩わしいHIS入力業務を簡便にし、請求業務をも支援する救急処置連携機能を導入したことに加え、診療文書管理・診療業務支援ソリューション「Yahgee（富士フィルム）」と統合診療支援プラットフォーム「CITA Clinical Finder（同）」を導入し、電子カルテと連携させた新しい記録システムを構築している（13ページ）。

医事課診療情報係長の金子龍一郎氏は、業務支援や請求業務支援といった機能をHISに持たせるための工夫について、つぎのように話す。

「業務改善の分野では、救急医療の現場で、煩わしいHIS入力業務を簡便にし、請求業務をも支援する救急処置連携機能を導入したことに加え、診療文書管理・診療業務支援ソリューション「Yahgee（富士フィルム）」と統合診療支援プラットフォーム「CITA Clinical Finder（同）」を導入し、電子カルテと連携させた新しい記録システムを構築している（13ページ）。

医事課診療情報係長の金子龍一郎氏は、業務支援や請求業務支援といった機能をHISに持たせるための工夫について、つぎのように話す。

「業務改善の分野では、救急医療の現場で、煩わしいHIS入力業務を簡便にし、請求業務をも支援する救急処置連携機能を導入したことに加え、診療文書管理・診療業務支援ソリューション「Yahgee（富士フィルム）」と統合診療支援プラットフォーム「CITA Clinical Finder（同）」を導入し、電子カルテと連携させた新しい記録システムを構築している（13ページ）。

医事課診療情報係長の金子龍一郎氏は、業務支援や請求業務支援といった機能をHISに持たせるための工夫について、つぎのように話す。

災害対策



【TB5】
自然災害だけでなく、システムやネットワークのトラブルで HIS がダウン、使用不能になった際の備えとして開発。ノート PC + 2TB HDD 端末 25 台に SS-MIX ストレージを組み込み、電子カルテ記述や直近 3 ヶ月以内の検査結果と処方情報、画像情報を保存。災害時には盗難防止のチェーンを付け、外来・病棟・トリアージ場所などに設置し、ネットワークすらダウンした災害時でも対応が可能となっている

「請求業務改善」
同院では、病院情報システムによる医療者への業務支援を行いつつ、医療者が入力したデータを活用して、さまざまな医療報酬算定業務の改善を図る機能を盛り込んでいる。

感染症対策機能や救急処置連携機能のほか、HIS と直接連携を果たしている。外来におけるエコー画像連携機能を構築して、その診療報酬算定につなげてい

る（12～13 ページ）。

「妊娠の有無は女性にとって非常にデリケートな問題であり、医療スタッフが直接女性患者に尋ねる行為はハードルが高い難題です。当院では、この妊娠の有無について問診票作成時に受診者に記入してもらうことで、このハードルを下げると同時に、問診票を会計箋として医事課が算定することで妊婦加算の算定につなげています。

この問診票は、その後 OCR 部分はデータとして取り込まれるので、身長、体重、喫煙、飲酒などのデータについて、各診療科の医師たちが多く関心を寄せており、特定健診につながる項目の設定などを検討中です。問診票のデータは、無論データベース上に保存されるので、臨床研究にも活用することが十分可能な体制となっています」（木村氏）

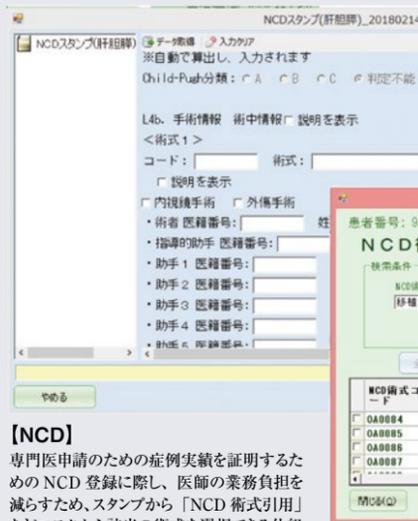
内視鏡手術動画の保存は、キャリア支援だけでなく、医療安全や訴訟対策などにも有用です。このシステムを見た開胸・開腹手術を行う医師たちからも、ヘッドマウント型のカメラでもできないかと相談され、この要望についても同じシステムで対応できています」（木村氏）

キャリア支援

る（12～13 ページ）。

「妊娠の有無は女性にとって非常にデリケートな問題であり、医療スタッフが直接女性患者に尋ねる行為はハードルが高い難題です。当院では、この妊娠の有無について問診票作成時に受診者に記入してもらうことで、このハードルを下げると同時に、問診票を会計箋として医事課が算定することで妊婦加算の算定につなげています。

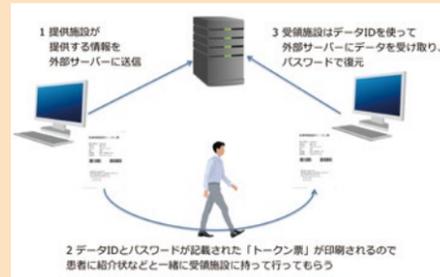
キャリア支援



【NCD】

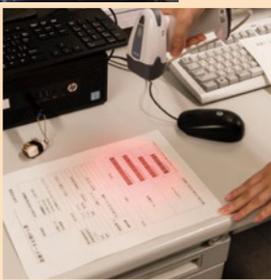
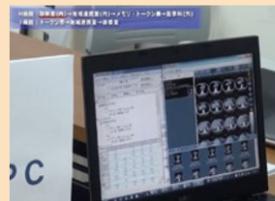
専門医申請のための症例実績を証明するための NCD 登録に際し、医師の業務負担を減らすため、スタンプから「NCD 術式引用」などマスタから該当の術式を選択できる仕組みを作成。電子カルテ上の各種データ（患者基本情報、手術時間、出血量、病名の ICD コード等）をスタンプ機能によって引用、自動入力し、アップロードすると共に、当院で症例登録内容をデータベース化する機能を開発、実装している

地域連携（電子データ加算）



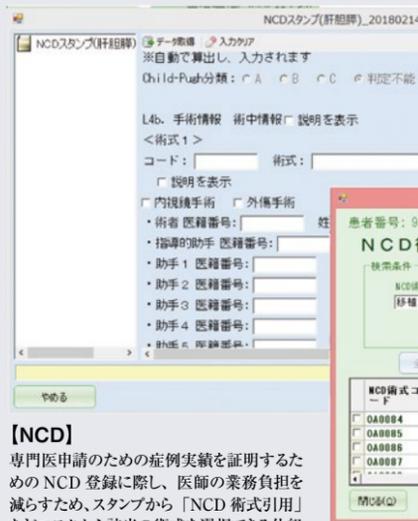
【紹介時電子データ連携システム netPDI】

IHE の標準的診療情報連携機能。情報提供施設が提供する情報を外部サーバに送信し、データ ID とパスワードが記載された「トークン票」を印刷。トークン票を患者に紹介状などと共に受領施設に持参してもらい、受領施設はデータ ID を使って外部サーバからデータを受領、パスワードで復元する。画像データは PACS から、検査結果や処方に関する情報は SS-MIX ストレージから取得する。特に画像情報の受け渡しについて、CD 運用の半分以下の時間で済み、セキュリティ面や診療放射線技師の労働負荷軽減に貢献している。これにより、紹介時電子データ加算を算定しており、連携支援病院である十全記念病院には月に 20～30 件紹介しているが、年数十万円が算定されるので、導入費用は償却される。今後は、IHE 以外の netPDI グループ、XDS とのローミングを予定している



【臨床研究用電子カルテスタンプ】

神戸市に拠点を置く医療イノベーション推進センター（TRI）からのオファーで、糖尿病に関する各種スタディのデータ収集にスタンプ機能を活用。各種検査結果を自動で収集し、所見はチェックボックスやプルダウンによって入力を効率化。データを集計して Excel による出力が可能とし、記載内容は電子カルテの記事として記録されることによりモニタリングを電子カルテの証憑性に担保。モニタリングを大幅に省力化するなど、キャリア支援に貢献している



スタンプから「NCD 術式引用」などマスタから該当の術式を選択できる仕組みを作成



【手術動画保存 AutoCLIP】

手術室の内視鏡カードに電源投入時点から自動的にサーバ録画を開始。SS-MIX から麻酔台帳の手術情報を取得、日時と部屋番号、手術開始・終了時刻で完全自動で切り出して動画ファイルを登録・保存。CITA 画面にアイコン表示され、クリックすると動画を再生・閲覧できる

浜松医科大学医学部附属病院



1977 年にオープンした浜松医科大学医学部附属病院は、静岡県西部医療圏の中核病院として地域医療を支えるほか、人口 10 万人当たりの医師数が都道府県別で 40 番目と医師数が少ない静岡県唯一の大学病院として医学生教育の拠点としての機能を果たしてきた。同院では、「50 年先を見据えた病院づくり」をコンセプトに掲げ、災害に強い病院、高度先進医療の提供などを目標して平成 18 年度から病院再整備事業を開始。2009 年に新病棟が竣工、2013 年には耐震工事および機能向上を目指した外来棟の改修工事が完了した。

所在地：静岡県浜松市東区半田山 1-20-1
病床数：613 床
外来患者数：1,290.4 人
入院患者数：541.8 人
※平成 29 年度 1 日平均

「医用画像や検査結果、処方情報の標準化は実現しました。このほか、DPC コード

今後の HIS とその標準化の方向性について、木村氏はつぎのように語る。

「当院で開発した機能の全ては、標準化された診療データを持つ施設であれば、いずれも複雑なカスタマイズ化をすることなく導入が可能なものばかりです。TB5 などは、医療機関における BCP のスタンダードとして活用してもらいたいですね。当院のシステムに興味・関心のある方は、是非見学に来ていただきたいと思っています」

「先に述べたとおり、大病院の HIS では、医学生や若手医師のキャリア支援を行う機能を充実させる必要があると考えます。これらの機能は、電子カルテが有する診療データを活用して、できる限り彼らのシステム入力の手間を減らすため、自動化されたシステム運用を心掛け

や NCD の臨床項目などもこれに準ずると言えるでしょう。しかし、診療データで大きな比重を占める所見項目については、まだフリーテキストの状態です。これを分析するための 1 つの手法としては自然言語処理が挙げられますが、私としては九州大学の中島先生が提唱する各分野ミニマムセットなど、各診療科のできるだけミニマムな、分析可能な形式で共通データとして取り込めるようにしていきたいと考えています。

所見項目に関する標準化を実現できれば、医療に役立つばかりでなく、日本の医療政策にも貢献できるデータベースの構築が可能となるのではないのでしょうか。

安価なパッケージ型システムが不要とは言いませんが、大病院をはじめとする HIS のハイエンド・ユーザーと医療 IT ベンダーが互いに協力しながら、より診療業務支援や医療者のキャリア支援、病院経営に貢献するシステムを開発し続けることが、今後も必要であると確信しています。

同システムは、入院診療計画書や退院時サマリー、褥瘡のケアなどにも活用されており、褥瘡のケアでは、全ての患者のカルテデータが都度チェックしなくても一覧表示されるので監査業務が容易になり、大いに役立っています」

金子氏は、医事会計システムとの連動で、診療報酬算定漏れが減少したと話す。「従来のシステムと比べ、扱いたい項目について病院側がある程度自由に設定できる点もありがたいですね。」

また、入院診療計画書や退院時サマリーが作成されているかなども一覧表で容易に確認できるので、リアルタイムに医療スタッフに文書作成を促すことができ、文書作成漏れも減少しています」

キャリア支援

キャリア支援の分野では、症例実績を証明するために必要な、NCD (National Clinical Database) 登録を支援する機能や、糖尿病に関する各種臨床研究ケースカードの登録支援を行うスタンプ機能、これも専門医認定に必要な内視鏡手術 (Avinci 含む) 全動画を麻酔記録から自動で編集し、HIS で保存・参照できる手術動画システムなどが構築されている (14 ページ)。